



松り字の巻



無はくは祥まをまはれ陳を

小のりまはる西村村長と申す

大木重信郎 静交

西条新末極誓願寺

小川 宗順
梨妻

字をまはるやまをまはるぬ峰の雪

梨妻

喜のりまはるのぬまをまはる

丸儀

津波淵まをまはるのやまをまはる

喜

胡座まをまはるのまをまはる

儀

茶藨まをまはるの煙ぬき

喜

まをまはるは七夕能 休

儀

無法より祥まを山に陳せ
と般小業を憐入を境申候
以候海よりまを山に陳せ

乙八月

修りてとて之を山に陳せと候の秋
里より如もきい本郷より行折方
網船より一日まを山に陳せ
友の月更しとてこれの月よりま
山より山に陳せと地也所の乞

文信所

梨妻

尾州名古屋西枇杷島六軒町

大木重信郎 静安

西条新末極楽寺

小川 宗明

小川 梨妻

儀 妻 儀 妻 儀

柳ちる様しや能かまし
藤スズメをのりを船の下積
る供等の裸呵能の口あへ
留ま居るをさへおさへを
傍にある古の冊子の跡うつき
形もふせぬようつりあはし
夏の夜に更け八月よぬあ
まのちとさきと時を以て

春儀 春儀 春儀 春儀 春儀 春儀

是とと蒲萄うつし此能か
ふもふとさきと水
花の宿意の夢をこん
長句のるをさし
中一合する跡つたの能
西条宮の連はさくたき
大切ふたつ一言いふ
筒麻イナヒの総の藤櫃さん

春儀 春儀 春儀 春儀 春儀 春儀

蒼海の波のしづかきよの風の
園の果のよも遊女屋のあはる
神引のよも情のぬくめ
あはれよ情の結るまの
般若のよもたけなす佛札
あはれあけよよも報屏風
結月のよも出ぬのよ何ゆへ
玉手山よもよも誤の世

儀 儀 儀 儀 儀 儀

暑のやら秋も桂柳も咲く
持籠る石のよも運へぬ
魚のよもなすも志ぬ鳥絨の甲
猪戸のよもくぬきなり
一本つゝ真ある花の夕け
たすよも低りあむ川

儀 儀 儀 儀 儀 儀

活き世のしるしを
地爐を 入る 暮 くる 月
門書の 袴着ぬりも
返屋を する なる なる なる
みくまの せよと なる なる なる なる
いひま なる なる なる なる

中流

雲 春 流 晴 雲

春の 夢 籠りの ぬる 春の 面 白
是れ なる なる なる なる
物 なる なる なる なる
日 和 山 なる 廊 なる なる
春の なる なる なる なる
風 なる なる なる なる
流 なる なる なる なる
春 なる なる なる なる

春 流 雲 春 流 雲 春 流

あつと本家つゝめと切なえ
あせりてあまのこころを
望む事なき川あつと月
しつとくさせぬ雛の羽さき
旅道へおとせしこころ同連
あつめと足元多し燈傘
若き時つれづれに思ふ日
を交へしとて庭の懐拂

雲 濤 雲 濤 雲 濤 雲 濤 雲 濤

あつと本家つゝめと切なえ
あせりてあまのこころを
望む事なき川あつと月
しつとくさせぬ雛の羽さき
旅道へおとせしこころ同連
あつめと足元多し燈傘
若き時つれづれに思ふ日
を交へしとて庭の懐拂

雲 濤 雲 濤 雲 濤 雲 濤 雲 濤 雲 濤

吸留をこころしく 泣き悔りり
 佛にまをす けりるりふの 苦
 縁をくはるきりし けりる
 ちこもあこぬ 影の考へ
 薩美茶屋場より花よよの 変
 出草名とけり けりる 巖
 春 雲 凄 春 雲 凄

夕をくよ月よのときぬ 白牡丹
 中々花ふりよ ちせぬ 春
 河原中の儘に 納家花しりかき
 砂土をよ引くとき 縁をり
 ともかくよと年の冬は ち気まん
 ち水咲くよのとき ち気まん
 春 雲 凄 春 雲 凄
 春 雲 凄 春 雲 凄

自省

表置り花よふるくけの草枕
出傍歌も狂歌師かうち
志のんふああり人のある多持松
色さよけせよ幸い漢之の
佛檀の箱の塗戸よ又うり
まふりまハ眼鏡をのり
月影の満る新也崎垣
暮しくるやそ貴所海取

喜 省 協 喜 省 協 喜 省

手の中を去る迂室より
煙をきくし傳よをよ六人
回阿よりあきるをよを除る
糸帆うさぬ沖のうらり
ららるる暗やありぬ田畑和
二舎半の妙ふ土地の名
はのよぬまはハ歌も舞はる
志けり明ぬ風よしらる

喜 省 協 喜 省 協 喜 省

葉のつらさゆきくゆきく競る
露者よふそそぬ典業 既
取次のをんあそそそ糖引を
そそそそ此知也そそそそ出る
流之そそそ流の水はそそそと
秋阿の像は葉の産子
月まそそ破せそ扇は移そそ
二る十りそ海そそそ風

省 瑞 春 省 瑞 春 省 瑞

七

餅まつりそそそそ海に水はそそ
そそそそそそそそ歌よあうりそ
今一夜火おめりそそそそそ
せんらりそそそそ遊いそそ
水手りそそそそそそそそ陰
雲よあそそそそそそそそ

省 瑞 春 省 瑞 春 省 瑞

風流のそとめおとあまのよ
高野の暮より清原川の
芳林舎を訪うて

古き山をむのしほん田植唄

梨毒

あま〜〜あま 五木 荻 菰

山 山

山の尾にうへよをたせと峰をえ

山

ち〜もと向うのたえぬ板を

山

月ありと晴ありと一 嵐

山

ま〜り 柳〜り 坂のり〜り 水

山

遠東の雪はいつも水黒に澄

山

久きあき寺を寂〜りもあ

山

屏風の画を〜り顔の雪あり

山

是れ袋さへ〜り志のふ身のち

山

春〜り〜り 雪を〜り〜り 重なる里

山

あ〜り〜り 門を〜り〜り 裏門

山

釣籠り〜り 水飲の所ら重なる

山

古き手塚の泥を引 さま

山

作まゝすこやつとある老の板
月と蛙の音をあらうあは
振舞は後院のほろ花見も
当座きしおあかこい海音
天をふとんとうまをぬはじ
投ち器をみちうまよと
まけあゝと厚くくつ利口めき
黒燐くまうりおせり 糧

春 山 春 令 山 春 山 春

牛とくそと始糸のつらぬお通干
あらの板の町中々知る
春丸とたる神馬を尋らり
一番歌よとくまあはせと
あゆみ物よあまへて風呂入
秋と酒とを人の間を
雪よあまはる月ひ冷まきり
何うと語のまうはよふ春

春 山 春 山 春 山 春 山

石切も自分吹草もたぐりあき
あちちをまきつるも汗ぐ
並ねしの路より子い水油
丸右折子りあしぬ四り過
結をのすくすくまきく
暮る交る 朝にまきつる

山 山 山 山 山

松島や夢もあつる自
あつるつよ海も澄む秋
橋廣き病も痛を墨とめ
のそみとるの海も澄む
消あき葉火も雪も誰か
空もよるを能くあつる

山 山 山 山 山
松島 梨 猿 自 葉 冬
浦

津川よやうりそ

夜まの〜れちしりや反も雪舞水

手來松岩

若魚〜つ亭の瓶をかんみち

要思

う〜しよの表書や解ん志のふ山

文字摺石

たんちよ麦取交よ信美摺

飯坂

初あや〜若葉のうへや十徳橋

寛方中お墓

こ〜紫のちびり〜花ぬ塚の上

蹴躡ヶ岳

葉よふり〜松枝垂り〜糸さ〜ら

瑞巖寺よ詣る途中よ

今をさのりの一本あり

初島の松林〜をり〜結る〜

親深字よや〜り〜るあ晴ぬの

顔字を賞よ

招島をさうよ雄島をかくまを

招浦島を子奴のうらをさる子一里
余のしを招う浪といふ家あり四殿崎
の招着くくくく岩よよ校を無能東海
よ望を佳景いもん方ふ一付招島よ
似うよいしと又さうらぬう世の歌人招う
浦島の古歌を以て招島の伝吟と
をいふ実地を踏さる編みりと福りはふ
やきとすの招くも

招風も波もきぬ一水とさる

黎真

高茶通御旅町
御摺物師
馬場利助

